

何故人は現在アリストテレスの本を読むべきだろうか？

作者：ジュディス・スワンソン

翻訳：エウゲニ・テムチェンコ（生徒 CAS '15）

デービッド・コルビンと一緒にスワンソン博士が書いた「アリストテレスの「政治学」の読者案内」という本は韓国語に翻訳された。この論文でスワンソン博士は政治を正門としてする学生に、アリストテレスが現在の社会にさえ適当な作者である事を証明している。

二千四百年前に生まれた哲学者の知恵は現在の社会にとって蒟蒻問答のような事だろう。特に、工学と、自然科学、計算機科学などが現在のエボラ出血や反テロ戦争のような問題を解決できると言われているからだ。実学が虚学に勝ったんだ。しかし、アリストテレスの科学は実学でもあり虚学でもある事を気付いたら、その科学は現在の科学と落とし所とか優秀な所があると理解できる可能性がある。

父親に似ていない息子入るんだが、アリストテレスの学者によると、アリストテレスの実証的なやり方により、彼の父親は物理学者だと可能性が高い。確かに、アリストテレスはよく観察していた。何回も「我々が見える」と書いていた。だが父親と違って、人間の体ばかりでなく、言葉と行為、つまり人のやり方といい方、を観察し、倫理学と政治学と修辞学と生物学に関して書くことになった。行為と意見は伝統となる事を説明する事で、アリストテレスが社会科学と根拠に関する敬意を確立した。

また、彼の科学は現在の科学と同じに観測を理解できるようになる意向がある。その理解し方は「理」ということである。アリストテレスは観測し記録した事ばかりでなく、その次第、必ず解析した。彼の時代には、ある神様の行為や力が理解できないという常識に対して、彼のやり方は世間離れだと考えられた。それ故に、ソクラテスやプラトンや他の先人のようにアリストテレスは世界が「理」のことで理解できると伝えている。

魂から宇宙まで、世界にある事を全部理解したくなり、物理科学と倫理科学の差を説明しようことにした。そうして、ニコマコス倫理学1. 3で「自然の許可による全体で制度を狙う事は目明きな人の特徴である」と断じた。その結論で、アリストテレスは証拠と理の重きを減少せずに、社会科学に対する数学的な答えがないと伝えている。

しかし、数学的な答えがなくても、社会科学の情報は何時も儂い訳ではない。驚くかも知れないが、アリストテレスによると、不自然といわれている都市国家は自然のことである。従って、社会には一定な原理があるとの事だ。原理がなければ、知識もなく、政治学もないと言うまでもない。それ故に、物理科学と倫理科学の差は黒白でなく、灰色のようにもっと不明である。

アリストテレスによると、物理科学と倫理科学のリエゾン（接点）は支配者と国民の「思慮」という善のことである。「善と悪、正と不正の知覚がある」ので、「人間は社会的動物である」と政治学1. 2の本で書いている。人間の社会は同じ価値観と社会正義に基づいていると、アリストテレスが伝えている。そして、決断は必ず行うことならば、道徳的

な中立の社会を作るの不可能である。恐らく、中立や相対主義が不可能であると、道徳的な教条主義はよく起こることになるかも知れない。誠に、現在アリストテレスを読みべく理由の一つは、かれの教条主義の正義の描写のことである。そしてその描写は政府が様々な個人的な正義を盛り込む必要だと指している。

アリストテレスによると国民の参加が政治の血のような事という。更に、「国民」の定義は政府に参加できる人だという。国民の参加がないと、レジームが必ず滅びる。それ故に、政治生命には自由と平等が必要なので、社会は自然的に自由と平等を狙っている。従って、民主主義の方が、アリストテレスによると、最も通常なレジームである。

しかし、我が良く暮らしたいの希望は民主主義を阻んでいるという。人間は自由と平等と共に栄えたいそうだ。『政治学』の始まりで、アリストテレスは、社会がある良さを狙うんだが、最も大事な良さを狙うのは政治の社会だと書いていた。その本では、環境による絶好な社会の作り方は論じている。

恐らく、現在の科学と技術は絶好な社会の至り方を覆っている。科学と技術の発見を促しても、アリストテレスは我々はどんな社会に住みたいのか問っている。故に、「何故人は現在アリストテレスの本を読むべきだろう？」という質問に、「物理科学ばかりの時代に、道徳的や政治的な勧告を聞いた方がいいから」と答えてもいいかも知れない。

ジュディス・スワンソン
准教授
政治学部
ボストン大学

平成26年12月4日
政治学部のニュースレターに注文した記事